

發蛾量からみた富山縣内ニカメイ

チュウの地域性について

望 月 正 己

近年、ニカメイチュウの発生が多いにもかかわらず、縣下各地の平年発生量についての資料がないため地域的発生型については何等知るところがないので、ここに、2化期の被害の甚しかつた昭和26年の縣下7カ所の資料を以て地域性を検討した。発生豫察の一資料となれば幸である。

まづ、誘蛾灯による年間全発蛾量を見ると第1表及び第1図の如くで、氣象並びに耕種的な関係が作用するために、早場米地帯に少く晩場米地帯に次第に多くなる傾向がみえる。

第1表 全発生量(1化+2化)

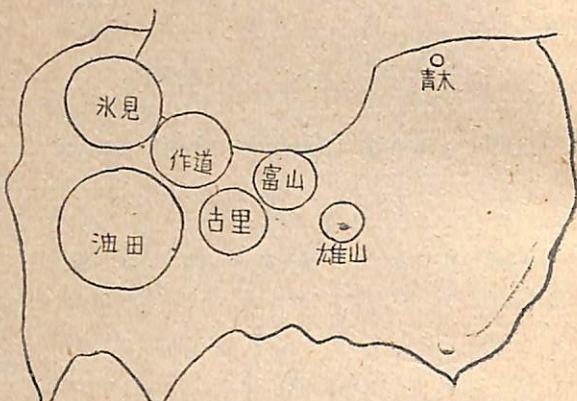
調査場所	油田	氷見	作道	古里	富山	雄山	青木	平均
誘殺蛾数	6844	5544	4478	3718	3571	2262	610	3273.8

つぎに、2化期は特に異常発生をして問題にされたほど特徴のある発生をしたので、この2化期の發蛾量をみると、第2表及び第2図のように、

第2表 2化期發蛾量

調査場所	氷見	油田	雄山	作道	富山	古里	青木	平均
誘殺蛾数	3158	2667	1289	870	618	402	173	1296.7

第1図 各地に於ける年間全発蛾量模式図

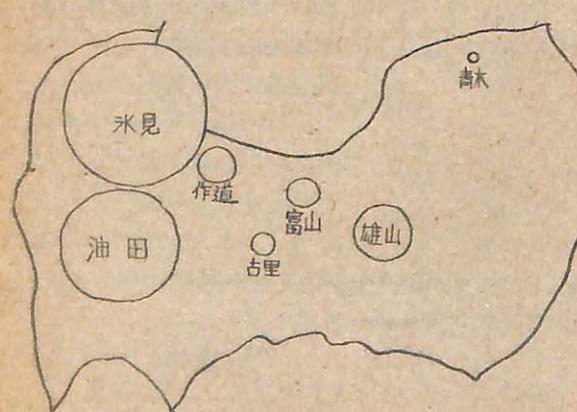


一見、年間の発生量に準じた傾向を示しているが、中央部の富山、

作道、古里は概して少く、発生量が百単位に止つてあり、何か同じような傾向を示している。即ち、このような2化期の異常発生に於ては最北端

の寒冷地青木を除くと縣内中央部の発生量よりも発生量が多くなることがあるといえよう。

次に、この2化期の發蛾量の解析を1化期の發蛾量と2化期の發蛾量との間の環境抵抗から行つてみると、第3表、第3図並びに第4表、第4図に示される通りで、縣内中央部はこの1化期の發蛾量も春から夏にかけての環境抵抗もほぼ同じ傾向にあり1化期の發蛾量は決して礪波、氷見の場合に劣っていない。この春から夏にかけての環境抵抗は、逆にこの中央部が最も強くて他の地区は弱い即ち、縣の中央部の3カ所、富山、作道、古里は1化期の發蛾量もほぼ同じであるために、従つて2化期の發蛾量もまた同一の傾向を示していたもの



第2図 各地に於ける2化期発蛾量模式図

といえる。なお、氷見、油田は第1化期の発生量

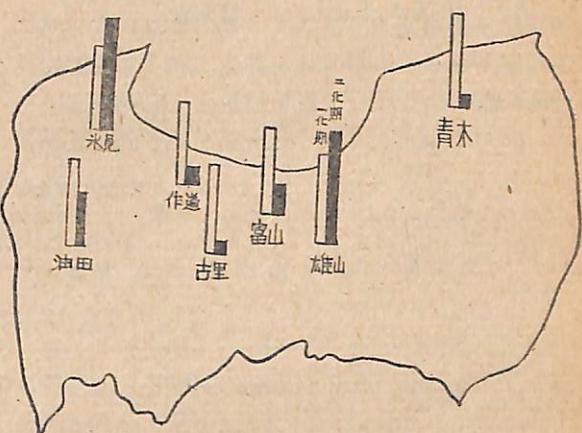
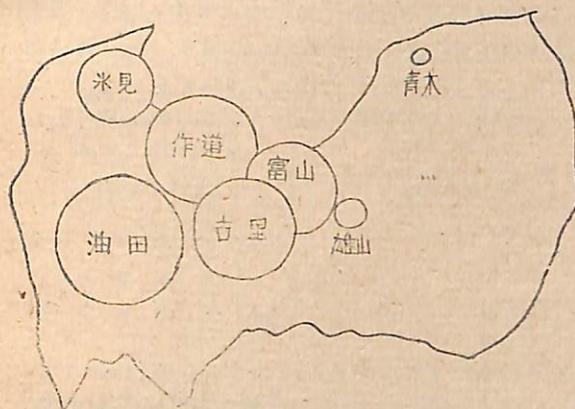
が多く、春から夏への環境抵抗は弱いために、當然中央部より発生の多くなる傾向を示しているが、雄山の如きは第1化期の発生量は少くても春から夏にかけての環境抵抗が弱いために中央部よりも2化期の発生量が増加するという傾向を示している。

第3表 第1化期発蛾量

調査場所	油田	作道	古里	富山	氷見	雄山	青木	平均
誘殺蛾數	4177	2608	3316	2953	2386	973	467	2554.3

第4表 地域別春～夏の環境抵抗指數

場所	氷見	雄山	油田	青木	作道	富山	古里	平均
1化：2化 の比率	1:1.32	1:1.32	1:0.63	1:0.37	1:0.24	1:0.21	1:0.12	1:3.53



第3図 各地に於ける1化期発蛾量模式図

第4図 各地に於ける春から夏の環境抵抗指數模式図

(富山農試 昭28)

富山県に於けるニカメイチユウの豫察について

望月正己・田口吟

二化螟虫の発生予察について、気象要素と發蛾量との相関及びそれに基く関係直線式、並びに各

化期に於ける利用暦を要約すれば、第1表及び第2表の如くである。

第1表 富山県に於けるニカメイチユウの発生豫察方式

項目	関係諸因子	相関係数	関係式
第1化 発蛾最盛期	(1) 5月1半旬の平均最高 氣温	$r = -0.782$	$y = -0.43x + 12.4$